

郷の集

行 校 部
小 学 部
新 郷 文 芸
愛 護 会
編 集 責 任 者
吉 江 源 右 門
印 刷 機 関
久 野 印 刷 機

四年間をふりかえって

学校長 林 五十二

形の整った二本の松に狭まれた校門から、一歩入ると、大きな松が天空にそびえ立ち校庭の芝生の緑が映えて思わず自然の美しさに心ひかれた。さて校舎に入ろうと思ったが、非常口の様な所はあちこちに見られるが玄關らしい所は見当もつかずうろ探しまわったことを先づ思い出す。

校舎は木造平屋建てで鉄筋校舎を見馴れていた私には如何にもわびしい感じがしたが中に入ると見ると床はきれいに磨かれており廊下には教材備品の戸棚がはみ出してはいたがよく整備されており、後ろの北側にも校舎が棟あるのを見つけた。思ったよりも広いのだなと好感が持てた。

内運へ回って見ると正面左側に貼った紙に「めあて」と書いてあった。それは今までに見ているどの学校の「めあて」よりも新鮮で素晴らしいものだと思った。以上は本校へ着任した時の初印象でした。

あれから今日まで、またたく間に四年間の月日が流れてしまいました。

先日、ふとしたことでニューモラルという小冊子を

手にしました。その本は、「うれしい言葉・さびしい言葉」という特集でした。言葉には人を育てる言葉とやる気をなくす言葉があるということです。

「すぐくまいよ。」上手だね。よくできたね。えらい。「などは、能力を認め、評価し、賞讃する言葉で

「きつとできるよ。もう少しがんばればよ。大丈夫だ。」は、励ましの言葉でこうした言葉で子供はすくすく育っていきます。

「馬鹿ね。だめね。こんなこともできないのか。」は子供達の心を傷つけ生長の芽を摘んでしまう言葉です。と書いてありました。わたしはその上に、

「はい。いいえ。」と決断ができる子と

「ありがたい。すみません。」と言える心の広い子を育てたいと思います。これが本校の「めあて」を達成させる具体的な方法だと考えています。学校は勿論、家庭でもこうした配慮をされていただければ有難いと思います。

ご挨拶

愛護会会長 坪田 万右衛門

例年以上に多く降り積った雪も日毎に消え、春の訪れも一歩々々と近づいてまいりました。会員の皆様方については日頃何かとお世話になって居ります事を、厚くお礼申し上げます。

一昨年春、思いもよらぬ大役の再任に戸惑いを感じてお引受け致しませんでした。二年、大過なく任期を終える事が、出来たのも先輩方のご指導と皆様方のご協力の賜と深く感謝致しております。

此の二年間を振り返って見ますと学校改革に関しては町会議員さんを始め改革促進期成同盟会役員の方、土地改良役員の方々がいろいろの面に検討審議を重ね

考え直し、原点に戻って、母親としての全体の活動をということでした。研修旅の御努力で懸念の校舎新築の問題も着々と進められていますが、今卒業されていくこの子等に間に合わなかったのが唯一一つの心残りです。

この頃は、文明の利器に頼りすぎ、自分から練習したり、耐えるという事も易きに染まることは、たやすいが苦しさに伴うものから逃げ出しがちでございいます。

これからは、学級と父兄との間を今まで以上に親密にするために、授業参観は学級委員会の活動とし、母親学級委員会は、母親全体の活動、研修旅行、社会見学、学校視察、年二・三回の講師をお招きしての講習会、講話会等、社会教育の一環とし、活動していくよ

部分の子が出来上がった。二・三の子が残される。出来上がった子が、

「ここはこうして……わかた。」

「うん、ありがとう。」

男子も女子もお互いに級友のために教えあっている。何と美しい姿なのでしょう。掃除の時も下級生をやさしく指導している子。床のふき方、道具の後始末まで親切に教える上級生の姿。出来ません。わかりません……等々毎日の生活にたくさんある事です。その時、それらについてぐくいてねいに教えてくれる人がいたとします。世の多

う、受け継いでいただければ幸いに思います。

長年の歴史を持つ、この学級は、いかなる諸問題が持ち込まれようと、その時代の進展や社会の変化に即応し、今後とも、大きく育ち続ける事と思ひます。

林校長、諸先生、会長、芦原町教育委員会の諸先生、各委員会の皆様、本当にありがとうございました。ご協力、ご援助、私の一生に、良い体験をさせていただきました。紙面をお借りしました。重ねてお礼申し上げます。ありがとうございました。

くの人、その人を親切な良い人と言うでしょう。

一方そんな時、「君、出来ない、わからな生懸命やってみなさい。どうしてもわからなかつたら相談のつてあげましょう。」

と、つきはなす人がいたとします。

本当に親切なと言う事はどう言う事なのでしょう。自分の進む道は、自分で切り開かなくてはなりません。人の力ばかりあてていては、だめだと思ひます。

さつをした時は、なぜ心が和み、あいさつを受けた時は、その人のあたたか味を感じたものですか。

最近のせわしい社会の中では、そのあいさつすらもせちからなくなってきたように思われます。

しかし、職場で、家庭内で、そして道で行き交う人達がみんな

「おはようございます。」

「ごろうさまです。」

と、あいさつが交わされたらそれはすばらしいことだと思います。

こんな小さなことから、生活にうるおいが出て、自分をも高めることができているのではないのでしょうか。

「おはようございます。」

「おはよう。」

「おはよう。」

力一パイ元気に交わす朝のあいさつで、夜の間にすっかり冷え切った古い校舎に、瞬く間にさわやかな空気がみなぎり、一日の生活が始められていく。

どの顔も生気に満ちた清々しい朝です。

わたしは、「元気におはよう」が言える子、元気にさようならが言える子になろう」と子ども達と約束をしています。

あいさつは、生活の躰とあいさつのできた子は、その一日に活気があり学習にも熱が入るよう思えるからです。

次男が、当時の私の様に希望に満ちて芦中へ巣立って行くと思うと私の胸に万感せまるものがあります。今日までは、先生初め肉親の加護の中に育ちましたが、これからは虫達の様に脱皮しながら一歩一歩大人に成って行くのです。君達はこの世に生まれて僅か十年余です。これからは勉学に一層励まされて、これから君達の前途に待つて、素晴らしい、希望に満ちた、素晴しい、堂々と胸を張って新郷健児の意気を見せて下さい。君達の後には、大勢の後輩が続くのです。声勢の行っても健康に留意されて、新郷魂、ここにありと頑張ってください。芦中も十四人が力を合わせて、他の学校の生徒に負けぬ意気を見せて下さい。君達の前途に幸あらんことを心からお祈りします。最後になりましたが、六年間、校長先生はじめ諸先生方、関係各位の皆様方のご尽力に對し心から感謝し、お礼を申し上げます。

卒業生のおめでとう

田畑 和夫

卒業おめでとう。私が昭和二十八年の春三月、小さな胸に夢ふくらませて、我が母校新郷小を巣立って早や二十七年になります。三年前に長男がそして今年

卒業にあたって

小本 藤治

皆さんが入学した四十九年四月一日。

あんなに小さくてかわいかった顔が今はもうこんなに大ききひきまわった顔になりました。

皆さんは六ヶ年の小学校生活を終え中学校生活に胸をふくらませ大きくはばたこうとしていきます。

しかしこの六年間長いよう短いような気がいたします。卒業本当におめでとう中学生になってもくじけず大きく成長してください。

親切

宮川哲二郎

今日も放課後の学習が始まっている。静かな教室の中に鉛筆の音がサラサラと聞こえてくる。ほどなく大

